

不妊治療現場の過去・現在・未来

連載3

～変化するもの・しないもの～

荒木 晃子

2010年のトピックス

本年度ノーベル医学生理学賞が、1978年世界初の体外受精による妊娠出産を成功させた、ロバート・エドワーズ氏（ケンブリッジ大学教授）に贈られた。同年、世界中が注目する中誕生した体外受精児ルイズ・ブラウンは「試験管ベビー」と呼ばれたが、のちに成人し、2006年には、自然に健康な男の子を出産した事実が確認されている。ノーベル賞は、ルイズの誕生から32年後の受賞であった。

報道された出生

前号から登場した、生殖革命の福音をきいた女性B子さんも、当時テレビ放映と新聞紙面で世界初の体外受精児ルイズ・ブラウン誕生のニュースを知ったという。1980年代といえば、一般家庭にインターネットが普及している現在とは違い、テレビ・ラジオ・新聞報道などのツールを

通して情報を入手する方法が一般的であった。その中、知人からの数少ないクチコミ情報や、書店に並ぶ専門書から不妊専門Yクリニックを知り、命がけで不妊治療を始めたというB子さんにとって、世界初の体外受精児誕生のニュースは、当時どう映ったのだろうか。たずねてみた。

「もちろん、うれしかったわよ！」躊躇することなく、即座に返事が返ってきた。

「初めてニュースを聞いたときはまだ不妊に悩んでなかった頃だったから、単なるニュースでしかなかったけれど、子どもがほしいのになかなか妊娠しないって悩み始めてからは、私たちにとってビッグ・ニュースに変わった。だって、日本以外でも不妊を治療している夫婦がいる。不妊治療は世界中でやっていることなんだ。日本では不妊のことを、あまり大きな声では言えないけれど、海外ではもっと進んだ技術があって、自分たちはその最先端の医療を受けるんだ、って信じていたもの！私たち夫婦は、そうやって不妊を治療することに決めたんだから」

弾んだ声で、まるで楽しい思い出を語るかのように、Bさんは一息でそう言い切った。

「与える人」と「与えられる人」

「あ、そうだ…」一瞬、遠い記憶をたどるかのように視線を泳がせた後、彼女は再び、静かに言葉を選びながら語り続けた。

「そう、不妊で悩んでるのは自分たちだけじゃない。治療して子どもが産める最新の治療が海外にはもっとあるんだって、希望を感じたんだって。まだ、あきらめなくていいんだって。その頃はまだ、日本で体外受精はメジャーな治療法ではなくて、タイミング療法や人工授精、他にホルモン療法を繰り返すくらいしか治療法がなかったから。ああ、そういえば、通院中に主治医にたずねたことがあった。確か、日本で初めて体外受精で子どもが生まれたというニュースを知った後のことだった。いよいよ日本でも体外受精ができるようになったと思い、“先生、私も体外受精ができるんですか？”って質問したの。そう、その時、先生はにっこり笑って答えてくださった。“いま、H 大学病院(国立)でうちの若手医師が体外受精チームに入って研修中だから、彼が研修を終えれば、B 子さんが Y クリニック初の体外受精にチャレンジできるかもしれませんね。体外受精で出産第一号になりますか？”って。それを聞いたときは、うれしくて、うれしくて…。“その時はぜひお願いします”って頭を下げたことを思い出した」

話を聞いている自分の表情が硬くなって

いるのがわかる。B 子さんと主治医との会話を、私は理由もなく不愉快に感じていた。いや、不愉快な要因は、確かに存在した。20 年以上前に交わされたそのやり取りからは、なぜか医師と患者の会話とはかけ離れた医療場面が浮かんでくる。まるで、B 子さんが体外受精の治験を受けるために、医師に頭を下げている印象さえ受けた。「与える人」と「与えられる人」の関係というか、いずれにせよ、共に子どもの誕生を願い、ひとつの命をこの世に送り出す責任を負う人間同士の会話とは思えなかった。そのなかで、私がいつも話の合間に心掛ける相槌の回数も自然に減っていたと思う。できるだけ B 子さんには気づかれることのない様、目を伏し目がちにし、小さくうなずきながら話を聴き続けた。

負のスパイラル

「その日、早速帰宅した主人に報告したことも覚えてる。それ以降、二人して、これで絶対子どもができるね、もっと頑張ろうね、ってまるで合言葉になった。それまでも転院を含め、すでに、治療を始めてずいぶん時間がたっていたし、何度も失敗を繰り返すわで、手術費を含む入院・治療費も数百万円支払っていた私たち夫婦にとって、たとえそれがどんな情報であっても、子どもを産む希望につながることは、すべて福音に聞こえていたのね、きっとあの時は。そう…今思えば、治療の失敗を繰り返すうち、少しずつ自分を見失っていたのかもしれない…。今となれ

ば、どう考えても、私らしくないもの。本当は、毎月服薬を続けたホルモン剤や流産予防薬の副作用で自分の体調を崩したり、時には救急車で搬送されるほどに悪化することも何度かあったの。心配掛けるのが嫌で、主人や家族にはあまり言わなかったけど。でも、そんな時は、自分のおなかを縦にはしる手術の傷跡に手を当てて、ここまでしたんだから大丈夫！お金もたくさん使ったし、きっと子供が授かる、って自分を励ましながら頑張ってた。あ！ほら、前回お話したわよね？『妊娠シヤスクナルタメニオ腹ヲ切ツタ話』。でも、まあ、結局妊娠できなかったんだから、意味なく身体に傷をつけただけだったんだけどね。う～ん…なぜ、あんなことができたのかなあ。あんなふうに思えたのか、今ではよくわからないのよ。まるで、治療すればするほど、深みにはまっていく感覚ていうか、麻痺するって表現がふさわしいかもしれない。次はきっと妊娠できるはず。これをやれば、絶対大丈夫、って、次第にやめられなくなる感じに近い。きっと、それほどまでに子どもが産みたかったんだと思うけど。だって、一人子ども産んだつもりで手術をするんだ、って周りに明言していたくらいだから！お腹切っただけじゃ、子どもは生まれないのにね～」

話し終わると同時に、彼女は聞こえないほどの小さい声で「ふふふ」と笑い、それから目を閉じ背筋を伸ばした。

「そうね、いま思うと、あの頃私は、自分であって自分でなかったかもね！」

滑りだすように始まった静かな語りから、終盤はいつもの快活な B 子さんに戻っていた。最後に私の眼に焦点を合わせ、に

っこり笑い言葉を休めた。どうやら、彼女にとって、ノーベル賞を受賞した「世界初体外受精成功の報道」は、まさに情報入手が難しかったその当時、待ち望んでいた不妊治療の最新情報だったらしい。その数年後、日本国内でも体外受精成功症例の報道を聞いた彼女は、早速主治医へ体外受精を実施してほしい旨、自ら名乗りを上げたという。

ダブル・メッセージ

ここまで話し終えた B 子さんを前に思うことがあった。彼女の語りには、ダブル・メッセージがあった。“福音に子どもを産む希望を感じた”と語る一方で、“失敗を繰り返すなか少しづつ自分を見失っていた”とある。また、“頑張っていた自分”の対象に、“自分であって自分でなかった”とも語っている。それはなぜか。確かめてみたい。喉元までこみあげたこの衝動を B 子さんに問うことはなかった。その時、私の背中に生じたひやりとした感覚に、おもわず言葉をのみこんでしまったからだ。疑うことなく生殖医療技術の進化を福音として受け入れる B 子さん自身に危機を感じた瞬間だった。

実際に、この世界中の注目を集めた児の誕生までには、20 年以上に及び研究の試行錯誤を繰り返したという。その研究成果は、途中 1969 年 2 月にネイチャー誌に発表され、その後試験管ベビー誕生までは、激しいバッシングとセンセーショナルな報道が続いたという。ある神学者は、

その研究行為自体を神をもおそれぬ不遜なものと非難し、著名な科学者たちもこの研究に懸念を示した。そんな状況下で、人類初の体外受精児は誕生したのだ。この情報は、当時 B 子さんには届かなかったのだろうか。聞こえてきた福音の背後には、もうひとつのメッセージがあったのだ。もしかして、B 子さんの語りにも覚えたダブル・メッセージは、彼女が信じた福音の背後にあった“もう一つのメッセージ”へ対応するものだったのではないのか。

もう一度問うてみなければ。彼女を傷つけることなく、自然な対話の中に B 子さんの思いが溶けて流れるような空間を作り上げながら。そう思った。(次号に続く)

再び、「だれの福音か」を問う

前号で、B 子さんは「不妊治療は私たち夫婦にとって福音だった」とはっきりした口調で私に告げた。私は、「あなたにとっては、どうだったのですか？」と勇気を出してたずねたのだ。B 子さんは、「夫婦の福音は、私にとっても福音に決まっていますよ？」と軽く受け流すように答えていた。

私は一瞬言葉を失いそうになった。それはかつて、戦後を生きた A 子さんの語りと何かが重なっていたのだ。

では、なぜ、彼女は現在独身なのか。共に福音を聞いた夫婦がなぜ、今も夫婦ではないのか。私の疑念は全く払拭できなかった。これまで、例えどんなテーマで語っても、そこから派生する彼女の不妊に対する語りは、やはり、「私」から「夫婦」へと移行していくことに、今回私は気付いていた。そして、その背後に流れるもう一つの「私の語り」の存在も。その二つの側面は一致していない。